社交不安に対する対人場面の解釈の偏りと 自動思考の効果¹

相澤 直樹² 神戸大学

The effects of interpretation bias for social events and automatic thoughts on social anxiety

Naoki Aizawa (*Kobe University*)

Many studies have demonstrated that individuals with social anxiety interpret ambiguous social situations negatively. It is, however, not clear whether the interpretation bias discriminatively contributes to social anxiety in comparison with depressive automatic thoughts. The present study investigated the effects of negative interpretation bias and automatic thoughts on social anxiety. The Social Intent Interpretation Questionnaire, which measures the tendency to interpret ambiguous social events as implying other's rejective intents, the short Japanese version of the Automatic Thoughts Questionnaire-Revised, and the Anthropophobic Tendency Scale were administered to 317 university students. Covariance structure analysis indicated that both rejective intent interpretation bias and negative automatic thoughts contributed to mental distress in social situations mediated by a sense of powerlessness and excessive concern about self and others in social situations. Positive automatic thoughts reduced mental distress. These results indicate the importance of interpretation bias and negative automatic thoughts in the development and maintenance of social anxiety. Implications for understanding of the cognitive features of social anxiety were discussed.

Key words: social anxiety, interpretation bias, automatic thoughts, covariance structure analysis.

The Japanese Journal of Psychology

2015, Vol. 86, No. 3, pp. 200–208

J-STAGE Advanced published date: July 10, 2015, doi.org/10.4992/jjpsy.86.13085

社交不安障害は、他者から注視されるかもしれない状況において過剰に強い恐怖と不安を体験し、そのために他者から否定的に評価されるような行動や反応をすることを恐れ、対人場面を避けようとする精神障害のひとつである（American Psychiatric Association & American Psychiatric Association, D. S. M. Task Force, 2013）。1970 年代以前にはあまり注目されなかった病態であるが、その後、広場恐怖や他の特定の恐怖症とは異なるものであることが示され、また、対人場面全

般を恐れる全般性の症状が提唱されるようになり、アメリカを中心ににわかに注目を集めるようになった（永田, 2009）。最近の大規模な疫学的調査ではうつ病やアルコール乱用、特定の恐怖症と並んでもっとも高頻度にみられる精神障害のひとつに挙げられている。日本では、従来同様の病態が対人恐怖症として知られてきたが、その研究がやや低調になったところに、上記のような趨勢を受けて社交不安障害が急速に注目されるようになった。

社交不安障害については、認知療法や認知行動療法の普及と軌を一にして広く知られるようになったこともあり、認知面に焦点を当てた研究が多数報告されている。そのなかでも、社交不安障害に特有の認知の偏りに着目したものが多く見うけられる（Hirsch & Clark, 2004）。たとえば、社交不安を高く示す人は、対人場面において否定的な出来事を予測しやすく、かつ、その影響を大きく見積もる傾向にあることが知られている（Foa, Franklin, Perry, & Herbert, 1996）。また、対人関

Correspondence concerning this article should be sent to: Naoki Aizawa, Graduate School of Human Development and Environment, Kobe University, Tsurukabuto, Nada-ku, Kobe 657-8501, Japan (e-mail: aizawa@kobe-u.ac.jp)

¹ 本研究の一部は、日本発達心理学会第 25 回大会（京都大学）において発表した。

² 本研究に対して、横浜国立大学の堀井 俊章先生、神戸女学院大学の石谷 真一先生、兵庫大学の犬植 崇先生に貴重なご協力をいただきました。記して感謝いたします。

係に関する否定的な言葉に注意が向きやすく、否定的な表情の顔に対しては注意がそれやすいことも示されている (Asmundson & Stein, 1994; Heinrichs & Hofmann, 2001)。さらに、対人場面において他者の意図や言動を否定的なものとして解釈しやすいこと、ならびに、事後的にも自身の達成に関する否定的な反芻をおこないやすいことがそれぞれ検証されている (Abbott & Rapee, 2004; Stopa & Clark, 2000)。以上のように、社交不安の高い人は、対人状況に入る以前から、対人状況を体験している最中、さらにその事後にわたって否定的な方向への認知の歪みを示すことが知られている。

このような比較的多岐にわたる認知の偏りの中で、とくに頻繁に研究されているのが対人場面における解釈の偏りである (Hirsch & Clark, 2004)。解釈の偏りとは、対人場面において他者の言動や意図を過度に否定的に解釈する傾向を指す。この分野の多くの研究では、社交不安障害の患者に対し仮想的な対人場面を提示し、そのような場面が実際に自分自身に生じたと想定させ、そこで認知判断を回答させる場面想定法が用いられている。そして、そこで認知判断を統制群や他の不安障害群と比較した結果、社交不安障害の患者がより否定的な解釈をおこなうことが示されている (Amin, Foa, & Coles, 1998; Stopa & Clark, 2000)。初期には、とくに他者の意図が曖昧な場面において解釈の偏りが生じるものとされていたが、その後の研究で、他者の意図が明らかに肯定的、ないしは否定的な場面においても、社交不安障害の患者は、一般統制群と比較してより否定的な解釈を示すことが検証されている (Voncken, Bögels, & de Vries, 2003)。また、以上の関連は、臨床対象だけでなく一般の社交不安傾向の高い人々、ないしは子どもや青年などを対象とした研究において繰り返し検証されている (Miers, Blöte, Bögels, & Westenberg, 2008; Vassilopoulos & Banerjee, 2008)。

以上のような流れを受けて、今日では社交不安にみられる否定的な認知の特質のより詳細な解明に関心が向けられつつある。その中でとくに注目されている論点の1つが、抑うつ、ならびに、抑うつに特有の認知の偏りとの関連である。これまでに、社交不安が抑うつ症状や抑うつ気分と高い割合で合併することが報告されてきた (Brown, Campbell, Lehman, Grisham, & Mancill, 2001)。同じことは、従来の対人恐怖心性に関する研究にも見ることができる。つまり、これまで広く用いられてきた対人恐怖関連の尺度に無力感や落ち込み、意欲の低下といった抑うつ気分と類似した内容の下位尺度が含まれているのである (堀井・小川, 1996, 1997)。他方で、抑うつ症状の背景にも特有の否定的な認知処理が働いていることが知られている (Beck, 1976 大野訳 1990)。そのような否定的な認知として、しばしば不合理な信念 (Ellis, 1962) と自動思考 (Beck, 1976 大野訳 1990) が取り上げられる。こ

れらの抑うつ的な認知の偏りは、いずれも社交不安にみられる認知の偏りとは内容面で異なるものの、否定的な評価判断であることには変わりはない。したがって、社交不安そのものやその情報処理の偏りに影響を及ぼしている可能性は十分に考えられる。場合によっては、社交不安の症状、ないしはその認知の偏りが抑うつ的な認知の偏りのひとつの現れに過ぎないのではないかといった疑問も生じる。

最近の研究の中にいくつかこの観点から検討をおこなったものがみられる。城月・野村 (2012) は、一般大学生を対象として、対人場面におけるコストバイアス、ならびに不合理な信念が、社交不安に及ぼす影響を検討している。そして、不合理な信念を統制しても、社交不安とコストバイアスとの間に中程度の強さの偏相関係数がみられたのに対し、コストバイアスを統制した分析では、不合理な信念と社交不安との関連がほぼ無相関となったことを受けて、コストバイアスの影響の優位性を論じている。池本・安保・宮崎・根建 (2013) は、前述の予測バイアスとコストバイアス、および不合理な信念が社交不安に及ぼす影響を検討している。パス解析を用いて影響関係を検討した結果、コストバイアスと不合理な信念の両者の正の効果を検証された。また、Cho & Telch (2005) は、非臨床群男女を対象に、対人場面における解釈の偏りと自動思考が社交不安、ならびに、抑うつに与える影響を検討している。その結果、対人場面での否定的な解釈の偏りが社交不安のみに、否定的な自動思考が抑うつにのみそれぞれ弁別的に作用し、肯定的自動思考のみが社交不安と抑うつに双方に有意な関連を示すとのモデルを検証した。

以上のように、いくつかの研究で不合理な信念や自動思考が社交不安に与える影響が検討されている。それぞれの研究において有意義な結果が得られているが、なお研究の量そのものが少なく、十分に一貫した知見が得られているとまではいえない。一方で、社交不安の心理療法においては、上記のような認知の偏りへの気づきと再検討が主要な課題となると考えられる (Kanai, Sasagawa, Chen, Shimada, & Sakano, 2010)。その際、仮に対人場面の解釈の偏りのみが影響を与えている場合には、その側面を集中的に検討すればよいことになるが、不合理な信念や自動思考も同時に影響を及ぼしているとすれば、否定的な自己認知や将来・過去展望、ならびにその背景にある思い込みについても検討の目を向ける必要があることになる。したがって、上記の論点を明らかにすることは、臨床実践上も大変重要であると考えられる。そこで、本研究では、社交不安に特有の認知の歪みとして解釈の偏りを、また、抑うつに特有のそれとして自動思考を取り上げ、それぞれが社交不安の諸特徴に及ぼす影響と相互の関連を検討する。

以上の点を検討する有効な手法として、共分散構造

分析による仮説モデルの検討があげられる。モデルの構成に関しては、これまでの研究の成果から解釈の偏りと自動思考が相互独立的、弁別的に社交不安の諸特徴に影響を及ぼすと仮定したモデルと、両者がともに社交不安に影響を及ぼすと仮定したモデルを検討する必要がある。本研究では、両モデルの適合度を比較検討することにより、社交不安に影響を及ぼす認知要因を明らかにすることを目指す。

方 法

調査参加者

A 県内の大学生 317 名（男性 120 名、女性 197 名：平均年齢 19.06 歳、 $SD = 0.95$ ）であった。

調査内容

以下の心理測定尺度を調査参加者に実施した。(a) 対人葛藤場面における他者意図判断尺度（相澤, 2011）の対人疎外場面に嫌悪判断、非嫌悪判断、不安の情緒反応を問う質問項目を設定したものをを用いた。対人疎外場面は、“電車内で着席した時に隣に座る同世代の人物に席を立たれる”場面、“自己紹介の最中に前の席の人に教室を出て行かれる”場面、“道端に屯する若者たちから笑い声が聞こえる”場面の 3 場面構成される。嫌悪判断、非嫌悪判断については“全くそう思わない（1 点）”から“きっとそうだと思う（7 点）”までの、不安については“全く感じない（1 点）”から“非常に強く感じる（7 点）”のそれぞれ 7 段階評定で実施し、3 場面の合計得点により嫌悪判断得点、非嫌悪判断得点、不安得点を算出する。この尺度の信頼性については、嫌悪判断、非嫌悪判断、不安のそれぞれの 3 項目の α 係数として .60, .50, .74 との値が報告されている（相澤, 2011）。全体的に低い値となっている点については、項目数の少なさの影響とともに、場面想定法という手法の影響が考えられる。特定の具体的な場面に対する認知判断を問う場面想定法は、実際にそのような場面をどの程度身近に体験しているかといった、個人の生活様式や環境要因の影響を受けやすいことが指摘されている（Homant & Kennedy, 2003）。そのために、項目得点に認知判断特性以外の個別的な要因が誤差として混入しやすく、結果の希釈化の問題が生じやすい。ただし、これまでの他の場面想定法を用いた先行研究では、おおむね一貫して特定の認知特性や気分行動との有意な関連を検出することに成功しており、この手法の妥当性が主張されている（Orobio de Castro, Veerman, Koops, Bosch, & Monshouwer, 2002）。本研究の他者意図判断尺度も、嫌悪判断傾向の高まりが対人関係における過敏さや不安、葛藤につながりやすいとの観点から、公的自意識、相互作用不安、対象攻撃性、自責感との関連が検討され、正の相関関係が

検証されている（相澤, 2011; 紺・相澤, 2011）。また、社交不安に特有の認知特性としては対人恐怖心性との関連が推測されるが、この点でも中程度の正の相関が得られている（相澤, 2012）。以上のことから、本尺度は、調査参加者の個別的な要因などの誤差の影響を受けやすい側面を持つものの、個人の嫌悪判断を測定することの妥当性は確保されているものと思われる。(b) ATQ-R（Hollon & Kendall, 1980）の児玉・片柳・嶋田・坂野（1994）による邦訳版をもとに、大植・森山・中谷（2012）が作成した短縮版を用いた。ATQ-R は、日常生活での自己陳述体験として肯定的、否定的な自動思考の頻度を測定するものであり、直近の 1 週間にそれぞれの思考がどの程度生じたかについて 5 段階で回答を求める。児玉他（1994）による邦訳版は、抑うつ診断や抑うつ体験との間で妥当性が支持されている（児玉他, 1994; 坂本・田中・丹野・大野, 2004）。本研究では、調査参加者への負担を考慮して、大植他（2012）による短縮版を用いた。なお、実施にあたって項目“消えてしまいたい”は、調査参加者への心理的負荷が大きいことが懸念されたので用いなかった。(c) 堀井・小川（1996）による対人恐怖心性尺度を用いた。この尺度は 6 因子構造（“自分や他人が気になる”悩み、“集団に溶け込めない”悩み、“社会的場面に当惑する”悩み、“目が気になる”悩み、“自分を統制できない”悩み、“生きていることに疲れている”悩み）が支持されており、公的私的自意識、YG 性格検査との間で妥当性が支持されている（堀井・小川, 1996, 1997）。

手続き

2013 年 4 月から 11 月の期間に講義時間内に調査質問紙を配布し、回答終了後にその場で回収した。一部は持ち帰りで実施し、翌週の講義時間内に回収した。調査参加者に対しては、調査の匿名性と質問紙の管理、参加の任意性を説明し、同意の上で回答するよう依頼した。なお、事前に神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究倫理審査委員会の承認を得た。

分析方法

以下の仮説モデルを構成して、共分散構造分析を実施した。まず、対人恐怖心性については、永井（1994）が対人状況における行動の諸特徴と、関係的自己意識、内省的自己意識の 3 つの高次因子に分類している。本研究では、この知見にしたがい、それぞれ対応する下位尺度得点にわけてモデルに組み込むこととした。つまり、対人状況における行動の諸特徴に対応する下位尺度として、“集団に溶け込めない”悩み、“目が気になる”悩み、“社会的場面で当惑する”悩みの 3 下位尺度に潜在変数を設定し、対人緊張とした。また、内省的自己意識に関連するものとして、“自分を統制できない”悩みと“生きていることに疲れている”悩み

Table 1
各尺度の基本統計量および α 係数

	平均	標準偏差	α 係数
他者意図判断尺度 (場面ごと)			
“電車” 場面 (3) ^{a)}	10.76	4.11	.77
“自己紹介” 場面 (3)	9.93	3.96	.82
“笑い声” 場面 (3)	11.13	3.99	.83
ATQ-R 短縮版			
将来に対する否定的評価 (6)	9.96	4.27	.80
肯定的思考 (6)	18.09	5.04	.83
自己に対する非難 (6)	14.02	4.86	.82
対人恐怖心性尺度			
“自分や他人が気になる” 悩み (5)	20.58	5.93	.80
“集団に溶け込めない” 悩み (5)	19.89	6.98	.91
“社会的場面で当惑する” 悩み (5)	20.39	7.00	.89
“目が気になる” 悩み (5)	16.75	6.94	.88
“自分を統制できない” 悩み (5)	18.57	5.88	.80
“生きることに疲れている” 悩み (5)	15.92	5.93	.82

a) 括弧内は項目数。

に潜在変数を設定し、自己萎縮感とした。一方、関係的自己意識に対応する下位尺度としては“自分や他人が気になる”悩みしかないので、この観測変数をそのままモデルに導入した。さらに、内省的なものであれ関係的なものであれ、意識や関心の側面が態度や行動に影響を及ぼすとの因果関係が想定されたので、自己萎縮感と“自分や他人が気になる”悩みから、それぞれ対人緊張にパスを設定した。そのほか、意図判断尺度の得点を観測変数とする潜在変数を嫌悪判断、自己に対する非難と将来に対する否定的評価を観測変数とする潜在変数を否定的自動思考とし、これに肯定的思考の観測変数を含めて、以下の2種類の因果モデルを作成した。

モデル1 嫌悪判断と自動思考が独立的にそれぞれに対応する社交不安の各側面に影響を与えるとするモデルである。前述の社交不安内でのモデルに加え、嫌悪判断から“自分や他人が気になる”悩みにパスを設定し、また、否定的自動思考と肯定的思考から自己萎縮感にパスを設定した。このモデルでは、社交不安における“自分や他人が気になる”悩みと自己萎縮感は、別々の認知の偏りから発生したものと理解される。

モデル2 2つの認知の偏りの双方が社交不安に影響すると仮定するモデルである。モデル1に加えて、嫌悪判断から自己萎縮感へのパス、ならびに、自動思考から“自分や他人が気になる”悩みへのパスをそれぞれ追加した。このモデルにおいて、嫌悪判断と自動思考の双方から“自分や他人が気になる”悩み、ならびに、自己萎縮感に有意な効果が得られれば、それぞ

れの認知の偏りがともに社交不安の諸症状に影響していることになる。一方で、いずれかの効果が有意なものとならなければ、他方の認知の偏りの要因のみが社交不安に有意な関連を持つことを示唆することになる。

結 果

各尺度の得点の算出と信頼性の検討

他者意図判断尺度における嫌悪判断の3項目、非嫌悪判断項目の3項目、不安項目の3項目についてそれぞれ信頼性係数を算出したところ、嫌悪判断で .54、非嫌悪判断で .49、不安で .66 と先行研究よりも低い値となった。一方、各場面内の嫌悪判断項目、非嫌悪判断項目、不安項目の相関係数は比較的高く、場面内での各項目の等質性の高さがうかがえた。そこで、非嫌悪判断項目を逆転項目として、各場面内での嫌悪判断項目、非嫌悪判断項目、不安項目の信頼性係数を算出したところ、項目数の少なさを考慮した上で十分な値が得られた。以上のことから、以下の分析では、非嫌悪判断を逆転項目として、場面内での嫌悪判断得点、非嫌悪判断得点、不安得点の合計得点を算出し、それらを意図判断尺度の得点として用いた。以上の得点、ならびに他の尺度の下位尺度得点の平均値と標準偏差、 α 係数を Table 1 に示す。

各尺度の相関

他者意図判断尺度と ATQ-R 短縮版との間で相関係

Table 2
他者意図判断尺度と ATQ-R 短縮版の相関

	1	2	3	4	5	6
1 “電車” 場面	—	.26 **	.35 **	.26 **	-.17 **	.28 **
2 “自己紹介” 場面		—	.32 **	.10	-.25 **	.13 *
3 “笑い声” 場面			—	.26 **	-.14 *	.27 **
4 将来に対する否定的評価				—	-.28 **	.77 **
5 肯定的思考					—	-.23 **
6 自己に対する非難						—

* $p < .05$, ** $p < .01$

Table 3
他者意図判断尺度、ATQ-R 短縮版と対人恐怖心性尺度の相関

	自分や他人が 気になる	集団に 溶け込めない	社会的場面で 当惑する	目が 気になる	自分を統制 できない	生きること に疲れている
“電車” 場面	.44 **	.20 **	.17 **	.20 **	.26 **	.27 **
“自己紹介” 場面	.29 **	.24 **	.31 **	.19 **	.24 **	.21 **
“笑い声” 場面	.48 **	.22 **	.24 **	.29 **	.32 **	.28 **
将来に対する否定的評価	.46 **	.31 **	.24 **	.30 **	.41 **	.61 **
肯定的思考	-.29 **	-.40 **	-.33 **	-.30 **	-.35 **	-.52 **
自己に対する非難	.55 **	.35 **	.24 **	.35 **	.40 **	.53 **

** $p < .01$

数を算出した (Table 2)。その結果、意図判断尺度の各場面得点間で弱い正の相関がみられた。また、ATQ-R 短縮版では、将来に対する否定的評価と自己に対する非難の間で強い正の相関、それらと肯定的自動思考の間で弱い負の相関がみられた。次に、他者意図判断尺度、ならびに、ATQ-R 短縮版と対人恐怖心性尺度の相関係数を算出した (Table 3)。その結果、他者意図判断尺度の各得点と対人恐怖心性尺度の各下位尺度との間に弱い、ないしは中程度の強さの正の相関がみられた。特に、他者意図判断尺度各得点と対人恐怖心性尺度の“自分や他人が気になる”悩みとの間に中程度の強さの相関がみられ、対人場面における解釈の偏りが対人関係における対他的な意識に関連することが示唆された。ATQ-R 短縮版についてもすべて有意な相関が示されたが、中でも将来に対する否定的評価、ならびに自己に対する非難と、対人恐怖心性尺度の“自分を統制できない”悩み、ならびに“生きていることに疲れている”悩みとの間に中程度からやや強い正の相関がみられた。この関連は、後者の下位尺度が社交不安の中における抑うつ的、自己萎縮的な悩みを反映していることを示唆するものと思われる。

仮説モデルの検討

前述の 2 つのモデルについて、最尤法による共分散構造分析を実施し、各指標の推定値を算出するととも

に、適合度指標を通じて各モデルのデータへの当てはまりの度合い、ならびにモデル間の比較を行った。モデルの適合度を検討するために、 χ^2 乗検定、GFI、AGFI、CFI、RMSEA を参考とした。また、モデル間の比較にあたっては 2 つの情報量基準 (BIC と CAIC) を用いた (豊田, 2007)。なお、ATQ-R 短縮版の将来に対する否定的評価と対人恐怖心性尺度の“生きていることに疲れている”悩みがやや強い正の相関を示した。これは、内容的にみて前者が無力感や挫折感の認知面、後者がその情緒反応面を測定しているといった点で特に強い関連があるものと思われた。そのため、潜在変数間の関係のみでは説明しきれない共変動が仮定されるので、両観測変数の誤差項に共分散を仮定した。また、モデル 2 では、肯定的自動思考から“自分や他人が気になる”悩みへのパスが有意な値とならなかったので除外した。

各仮説モデルの適合度 (Table 4) をみると、嫌悪判断と自動思考の独立的な影響を仮定したモデル 1 は十分な適合度を示さなかった。一方、嫌悪判断と自動思考双方からの効果を仮定したモデル 2 は良好な適合を示した (Figure 1)。モデル間の BIC と CAIC の比較においても、モデル 2 がモデル 1 に比べて大幅に小さな値を示しており、このモデルの適合度の良さが示された。

モデル 2 の中での各変数の影響関係をみると、嫌悪判断は“自分や他人が気になる”悩みに対して .68 の

Table 4
仮説モデルの適合度

	χ^2	df	GFI	AGFI	CFI	RMSEA [90%CI]	BIC	CAIC
モデル 1	155.404	47	.925	.875	.933	.085 [.071-.101]	333.930	364.930
モデル 2	108.375	45	.946	.907	.961	.067 [.051-.083]	298.419	331.419

注) GFI: goodness of fit index; AGFI: adjusted goodness of fit index; CFI: comparative fit index; RMSEA: root mean square error of approximation; BIC: Bayes information criterion; CAIC: consistent Akaike information criterion.

直接効果, 自己委縮感に対して .38 の直接効果, 対人緊張に対して .38 の総合効果を示した。否定的自動思考は, 自己委縮感に対しては .37 の直接効果, “自分や他人が気になる” 悩みへは .26 の直接効果, 対人緊張に対しては .26 の総合効果を示した。また, 肯定的思考は, 自己委縮感に -.33 の直接効果, 対人緊張には -.17 の間接効果を示した。

考 察

本研究では, 対人場面に関する認知の偏りとして嫌悪判断, 抑うつ的な認知の偏りとして自動思考を取り上げ, それぞれの社交不安への影響を検討した。社交不安, 嫌悪判断, 肯定的, 否定的自動思考を含む仮説モデルを作成し, 共分散構造分析による検討をおこなったところ, 嫌悪判断, 自動思考双方からの影響を仮説するモデルが採択された。

モデル内の嫌悪判断と社交不安の関連をみると, 嫌悪判断から“自分や他人が気になる”悩みに対して正

の効果がみられる。このことは, 他者の意図の否定的な解釈が, 他者を前にした時の自分や他者に対する過敏さにつながりやすいことを示唆する。人との関係で嫌われた, 避けられたと受け取りやすいと, 否定的な評価を予期して, 対人場面における自分自身の反応や行動, 他者からの反応に注意関心が向きやすくなるものと考えられる。同時に, 嫌悪判断は, “自分や他人が気になる”悩みを介して, 対人緊張に間接的な影響を及ぼしていた。前述のように嫌悪判断によって“自分や他人が気になる”悩みが高まると, 対人場面での緊張感や行動のぎこちなさが強く意識され, 精神的苦痛が高まることは容易に想定される。したがって, 以上のような影響関係は理論的にも妥当なものであると言える。

以上の結果は, 対人場面における解釈の偏りが社交不安全般に影響を及ぼすことを示唆している。“自分や他人が気になる”悩みについては, 森田 (1960) が初期に対人恐怖の症状形成における注意関心の役割を

Figure 1. 対人恐怖心性と嫌悪判断, 自動思考との関連

** $p < .01$

注) 相関のない誤差変数は省略。図の数値は標準化係数を示す。

精神交互作用として重視したように、従来の臨床研究は、対人場面における緊張や困惑そのものよりも、それを過度に気にして思い悩む傾向を重視してきた。また、近年の社交不安障害の認知モデルでも、対人場面における自己への意識関心の集中を中心的な要因に位置づけているように（クラーク・エーラーズ 丹野監訳 2008）、社交不安の形成と維持において主要な要因と位置づけられている。本研究の結果は、そのような対他的な意識に嫌悪判断が大きな影響を与えていることを示唆している。ただし、それだけでなく、本研究では嫌悪判断が自己萎縮感を介して間接的に対人緊張に影響していることも示された。このことは、対人場面における他者の言動を否定的にとらえることが自信の喪失や意欲の低下などの自己意識面での問題につながり、結果として対人場面での緊張や苦痛に結びつくということを示している。このように、本研究の結果は嫌悪判断が対他的、対自的双方の意識に否定的な影響を及ぼし、対人緊張を高めることを示唆しているといえる。

一方で、否定的な自動思考についても、“自分や他人が気になる” 悩みへの直接効果、ならびにそれを用いての対人緊張の間接効果がみられた。前者については、否定的な自動思考も、対人場面における自他への意識関心の集中を引き起こしうること示している。自分自身や自分の先行き、ないしは自身を取り巻く世界に対して否定的に認知しやすいと、対人場面における自分自身にも自信が持てないであろうし、そのことが対人場面における自他への過敏さをもたらすことは十分に考えられることである。

一方で、否定的な自動思考も、社交不安における自己萎縮感を媒介して対人緊張に影響を及ぼしていた。このことは、否定的な自動思考から、自他への過剰な意識関心を経ることなく、直接的に社交不安的な反応や行動が引き起こされることを示唆する。自己や自己の将来、世界に対する否定的な認知は、全般的な活動性の低下や意欲の低下をもたらすと考えられるし、そのことがそのまま対人場面に出ることへの戸惑いや抑制につながることは十分に考えられる。これまでの関連との違いは、とくに対人場面における認知の歪み、あるいは過敏さや葛藤をともしないという点にあると思われる。これについては、近年指摘されている社交不安や対人恐怖の下位類型が関連しているものと思われる。近年の研究では、これらの病態の中に、単に対人場面での不安や緊張を主訴とするものと、対人場面における他者の視線への葛藤を示すものが存在することが示唆されている（清水・岡村, 2010）。今回のモデルで示された以上の関連は、単純な不安や恐怖が中心となる社交不安の成立過程を反映するものと考えられる。

今回の研究では、肯定的な自動思考の影響もあわせ

て検討した。その結果、肯定的な自動思考は、社交不安の中の自己萎縮感を緩和し、それを介して対人緊張を低下させることが示唆された。対人緊張に対する総合効果は負の値となっており、肯定的自動思考は社交不安を抑制する効果があると考えられる。

本研究の結果は、対人場面における解釈の偏りと抑うつ的な自動思考の双方が社交不安全般に影響を与えることを示唆するものとなった。Ingram & Kendall (1987) は、以上のようなやや錯綜した関連を整理するために精神病理の認知要因モデルを提示している。このモデルは、認知要因に、さまざまな症状や悩みに共通する共通特性と、それぞれの症状や悩みに特有の決定特性を仮定し、それぞれの精神症状が、共通特性により健全な状態から区別され、決定特性により他の精神疾患から区別されると整理する。その中で、Ingram & Kendall (1987) は、共通特性として自己没頭と自動的処理、非対称性（否定的な自己陳述の多さ）を挙げ、決定特性としては特定の認知内容への偏り、過去の不安体験の想起、課題回避的な思考を挙げている。前者は、明らかに否定的な自動思考の特性に近いものであり、後者は、より特定の対象や場面に対する認知の偏りに相当するものといえる。以上のようにみると、本研究で示された解釈の偏りと否定的自動思考双方の影響の強さは、この認知要因モデルに対応しているものと思われる。

ただし、以上の結果をもたらしただ可能性のある方法論上の問題点として、以下の2点をあげることができる。1つは認知の偏りの測定法に関するものである。本研究で用いた ATQ-R 短縮版は質問項目式によるものであるのに対し、他者意図判断尺度は場面想定法を用いている。後者の方法は広く用いられているものであり、繰り返しその妥当性が確認されているが、前述のように全般的に結果の希釈化が生じやすいことが示唆されている（Orobio de Castro et al., 2002）。このような影響を受けて、今回の研究では相対的に否定的自動思考の影響が強く表れた可能性が考えられる。したがって、以上の関連については、同一の測定様式を用いた研究により再度検討される余地が残されている。

また、もう1点も尺度に関するものである。今回は、社交不安の中における抑うつ的な特徴をとらえるため、対人恐怖心性尺度の中の下位尺度である“生きていることに疲れている” 悩みと“自分を統制できない” 悩みを用いた。これらの下位尺度は、YG 性格検査の抑うつ性や劣等感、一般的活動性と妥当な関連が示されており（堀井・小川, 1997）、社交不安の抑うつ的な側面や意欲低下を反映していると考えられる。ただし、抑うつ症状そのものとは異なることが考えられ、それよりも対人恐怖心性尺度の他の下位尺度や潜在変数と強い関連が出たものと予想される。そのため、自己萎縮感を介して対人緊張に影響を及ぼす自動思考の

効果が高くなり、相対的に自動思考の効果が高く表れた可能性がある。抑うつ症状そのものを測定する尺度を用いると、それらの関連はより低くなることが想定される。以上の点も含めて、今後の検討が必要である。

引用文献

- Abbott, M. J., & Rapee, R. M. (2004). Post-event rumination and negative self-appraisal in social phobia before and after treatment. *Journal of Abnormal Psychology*, **113**, 136–144.
- 相澤 直樹 (2011). 対人葛藤場面における他者の意図の判断と情緒反応について——場面想定法による敵意帰属と嫌悪判断の測定とその妥当性—— 心理臨床学研究, **29**, 365–370.
- (Aizawa, N. (2011). Hostile intent attributions, avoiding intent interpretations, and emotional reaction in interpersonal conflict situations: A hypothetical-situation questionnaire and its validity. *Journal of Japanese Clinical Psychology*, **29**, 365–370.)
- 相澤 直樹 (2012). 自己愛的傾向・対人恐怖の傾向と対人葛藤場面における他者意図の判断 日本心理学会第 76 回大会発表論文集, 405.
- (Aizawa, N. (2012). On relation between narcissistic tendency, anthropophobic tendency, and negative intent interpretations in interpersonal conflict situations. *Proceedings of the 76th Annual Convention of the Japanese Psychological Association*, 405.)
- American Psychiatric Association, & American Psychiatric Association, D. S. M. Task Force (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders: DSM-5*. Washington, DC: American Psychiatric Publishing.
- Amin, N., Foa, E. B., & Coles, M. E. (1998). Negative interpretation bias in social phobia. *Behavior Research and Therapy*, **36**, 945–957.
- Asmundson, G. J. G., & Stein, M. B. (1994). Selective processing of social threat in patients with generalized social phobia: Evaluation using a dot-probe paradigm. *Journal of Anxiety Disorders*, **8**, 107–117.
- Beck, A. T. (1976). *Cognitive therapy and the emotional disorders*. Madison, CT: International Universities Press.
- (ベック, A. T. 大野 裕 (訳) (1990). 認知療法——精神療法の新しい発展—— 岩崎学術出版社)
- Brown, T. A., Campbell, L. A., Lehman, C. L., Grisham, J. R., & Mancill, R. B. (2001). Current and lifetime comorbidity of the DSM-IV anxiety and mood disorders in a large clinical sample. *Journal of Abnormal Psychology*, **110**, 585–599.
- Cho, Y., & Telch, M. J. (2005). Testing the cognitive content-specificity hypothesis of social anxiety and depression: An application of structural equation modeling. *Cognitive Therapy and Research*, **29**, 399–416.
- クラーク, D. M.・エーラーズ, A. 丹野 義彦 (監訳) (2008). 対人恐怖と PTSD への認知行動療法——ワークショップで身につける治療技法—— 星和書店
- Ellis, A. (1962). *Reason and emotion in the psychotherapy*. New York: Lyle Stuart.
- Foa, E. B., Franklin, M. E., Perry, K. J., & Herbert, J. D. (1996). Cognitive biases in generalized social phobia. *Journal of Abnormal Psychology*, **105**, 433–439.
- Heinrichs, N., & Hofmann, S. G. (2001). Information processing in social phobia: A critical review. *Clinical Psychology Review*, **21**, 751–770.
- Hirsch, C. R., & Clark, D. M. (2004). Information-processing bias in social phobia. *Clinical Psychology Review*, **24**, 799–825.
- Hollon, S. D., & Kendall, P. C. (1980). Cognitive self-statements in depression: Development of an automatic thoughts questionnaire. *Cognitive Therapy and Research*, **4**, 383–395.
- Homant, R. J., & Kennedy, D. B. (2003). Hostile attribution in perceived justification of workplace aggression. *Psychological Reports*, **92**, 185–194.
- 堀井 俊章・小川 捷之 (1996). 対人恐怖心性尺度の作成 上智大学心理学年報, **20**, 55–65.
- (Horii, T., & Ogawa, K. (1996). The construction of a scale for the measurement of anthropophobic tendency. *Psychological Report of Sophia University*, **20**, 55–65.)
- 堀井 俊章・小川 捷之 (1997). 対人恐怖心性尺度の作成 (続報) 上智大学心理学年報, **21**, 43–51.
- (Horii, T., & Ogawa, K. (1997). The construction of the scale for the measurement of anthropophobic tendency (second report). *Psychological Report of Sophia University*, **21**, 43–51.)
- 池本 奈都・安保 恵理子・宮崎 球一・根建 金男 (2013). 思考の柔軟性、認知バイアス、社交不安傾向の関連 早稲田大学臨床心理学研究, **12**, 19–27.
- (Ikemoto, N., Ambo, E., Miyazaki, K., & Nedate, K. (2013). The relationships among cognitive flexibility, cognitive bias, and social anxiety. *Waseda Journal of Clinical Psychology*, **12**, 19–27.)
- Ingram, R. E., & Kendall, P. C. (1987). The cognitive side of anxiety. *Cognitive Therapy and Research*, **11**, 523–536.
- Kanai, Y., Sasagawa, S., Chen, J., Shimada, H., & Sakano, Y. (2010). Interpretation bias for ambiguous social behavior among individuals with high and low levels of social anxiety. *Cognitive Therapy and Research*, **34**, 229–240.
- 児玉 昌久・片柳 宏司・嶋田 洋徳・坂野 雄二 (1994). 大学生におけるストレスコーピングと自動思考、状態不安、抑うつ症状との関連 ヒューマンサイエンス, **7**, 14–26.
- (Kodama, H., Katayanagi, K., Shimada, H., & Sakano, Y. (1994). The relationship among stress coping with automatic thoughts, state anxiety, and depressive symptoms in college students. *Waseda Human Science Research*, **7**, 14–26.)
- 紺 真理・相澤 直樹 (2011). 青年期における攻撃性について——第二の個体化過程と対人葛藤場面における他者の意図の判断から—— 神戸大学大学

- 院人間発達環境学研究科研究紀要, **5**, 9-18.
(Kon, M., & Aizawa, N. (2011). On the relation between adolescent aggression, second-individuation process, and negative intent interpretations in interpersonal conflict situations. *Bulletin of Graduate School of Human Development and Environment, Kobe University*, **5**, 9-18.)
- Miers, A. C., Blöte, A. W., Bögels, S. M., & Westenberg, P. M. (2008). Interpretation bias and social anxiety in adolescents. *Journal of Anxiety Disorders*, **22**, 1462-1471.
- 森田 正馬 (1960). 神経質の本態と療法——精神生活の開眼—— 白揚社
(Morita, M.)
- 永井 徹 (1994). 対人恐怖の心理——対人関係の悩みの分析—— サイエンス社
(Nagai, T.)
- 永田 利彦 (2009). 社交不安障害の概念の拡大と対人恐怖症 こころの科学, **147**, 32-36.
(Nagata, T.)
- 大植 崇・森山 美知子・中谷 隆 (2012). 看護師を対象とした ATQ-R (Automatic Thoughts Questionnaire-Revised) 短縮版作成と信頼性・妥当性の検討 広島大学保健学ジャーナル, **11**, 20-28.
(Ohue, T., Moriyama, M., & Nakaya, T. (2012). Development of a shorter version of the Japanese version of ATQ-R (Automatic Thoughts Questionnaire-Revised) for nurses: Examination of reliability and validity. *Journal of Health Sciences, Hiroshima University*, **11**, 20-28.)
- Orobio de Castro, B., Veerman, J. W., Koops, W., Bosch, J. D., & Monshouwer, H. J. (2002). Hostile attribution of intent and aggressive behavior: A meta-analysis. *Child Development*, **73**, 916-934.
- 坂本 真士・田中 江里子・丹野 義彦・大野 裕 (2004). Beck の抑うつモデルの検討——DAS と ATQ を用いて—— 日本大学心理学研究, **25**, 14-23.
(Sakamoto, S., Tanaka, E., Tanno, Y., & Ono, Y. (2004). Testing Beck's model of depression: Using the DAS and the ATQ. *Psychological Research, Nihon University*, **25**, 14-23.)
- 清水 健司・岡村 寿代 (2010). 対人恐怖心性-自己愛傾向 2 次元モデルにおける認知特性の検討——対人恐怖と社会恐怖の異同を通して—— 教育心理学研究, **58**, 23-33.
(Shimizu, K., & Okamura, H. (2010). Cognitive traits in people with anthropophobic tendencies: A two-dimensional model of narcissistic personality comparing anthropophobic and social phobic symptoms. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **58**, 23-33.)
- 城月 健太郎・野村 忍 (2012). 社会不安に対するコストバイアスと不合理な信念の関連 心身医学, **52**, 229-236.
(Shirotsuki, K., & Nomura, S. (2012). The relationship of cost bias and irrational belief to social anxiety. *Japanese Journal of Psychosomatic Medicine*, **52**, 229-236.)
- Stopa, L., & Clark, D. M. (2000). Social phobia and interpretation of social events. *Behavioral Research and Therapy*, **38**, 273-283.
- 豊田 秀樹 (2007). 共分散構造分析 Amos 編——構造方程式モデリング—— 東京図書
(Toyoda, H.)
- Vassilopoulos, S. P., & Banerjee, R. (2008). Interpretations and judgments regarding positive and negative social scenarios in childhood social anxiety. *Behavior Research and Therapy*, **46**, 870-876.
- Voncken, M. J., Bögels, S. M., & de Vries, K. (2003). Interpretation and judgmental biases in social phobia. *Behavior Research and Therapy*, **41**, 1481-1488.

—— 2014. 3. 28 受稿, 2015. 1. 24 受理 ——